

学長室だより

2018.11.26 NO.13

外国人留学生、秋田で「脱皮」

国際教養大は2年生の後半から3年生にかけて、学生を世界49カ国・地域の提携大学に「交換留学生」として送り出す。一方で、一定数の留学生を提携大学から受け入れている。

従って主に1年生、2年生、4年生は本学の学生だが、3年生は海外からの留学生で、いわばサンドイッチ構造になっている。

留学生は毎日の勉強の傍ら、県内の農業や産業の現場に足を運び、生活体験をしながら学んでいる。秋田での生活を通して何を感じているのか。留学生たちが生活体験を語る「Student Voice（学生の声）」というHPのコーナーからいくつか紹介したい。

タマサート大学（タイ）からきたワシニさんは、秋田竿燈まつりのお囃子チームに加わり、その練習がいかに厳しいかを実感した。ただ、チームの一員になることで、友情だけでなく、人を尊敬することや責任感を学んだという。ほかにも、横手市のりんご園では、片手では持てないほど大きなりんごの収穫も2日間経験した。最高のりんごをつくるために、農家の方々が細部まで気を使っていることがわかったと話す。

輔仁大学（台湾）のチンウェンさんは納豆で有名なヤマダフーズ（美郷町）で、最初はおいやつるつる滑る舌触りに悩まされたそうだ。納豆を初めて食べるとともに、納豆ソースなど関連の食品の多様性に感心したという。ほかにも、木工加工の丸松銘木店（能代市）では、見事な木工品を作る職人技に感嘆している。

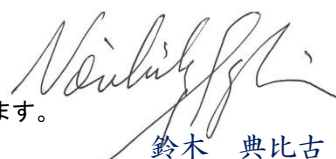
メキシコから入学したピネイロさんは気軽に学長室に現れる人気者だが、母国では雪を見たことがなかったそうだ。秋田に来て雪を見て感動し、スキーを習ううち、平昌オリンピックに出場しようと思立ち、猛烈な練習に励んだが、惜しくもメキシコ代表の座を逃した。今はロシアに留学中だ。

リーズ大学（英国）から来たメイヤーさんは冬のさなか、ホームステイ先に羽後町の結婚式へ招かれた。すっかり暗くなった雪道を和服姿の新郎新婦が静々と歩いてくる幻想的な情景に感激した。寒さしのぎに薪のたき火で暖をとったこととあわせて印象深いという。

ここに挙げたのは4人の留学生の体験と追憶にすぎない。留学生の多くは、最初は留学自体にあまり気が進まず、秋田に来て最初戸惑いの連続だったという。しかし、秋田での生活で様々なことを学ぶうちに自分の中で何かが変わり、秋田というレンズを通して世界を見ている自分に驚き、「世界に向かって脱皮したことを自覚するようになった」と異口同音に語る。

将来、彼らが成長を通じて、秋田の魅力を世界に発信するようになるだろう。キャンパスの中では、日々こうした実験が続いている。

注) 朝日新聞秋田版「あきたを語ろう」からの転載です。以下 URL からご覧いただけます。
<http://www.asahi.com/area/akita/articles/MTW20181126051550001.html>



鈴木 典比古

President Norihiko Suzuki, DBA